

日本森林学会公開講演会

## 人文科学から

# 森林科学へのアプローチ

## 発表要旨集



主催 一般社団法人 日本森林学会企画委員会

日時 2025年5月28日(水) 14:00~17:00

場所 日本森林技術協会3階大会議室、オンライン併用

### 趣旨

今日、気候変動や生物多様性など環境問題への取り組みが喫緊の課題となる中、多様な視点からのアプローチが重要とされている。森林科学は、多様な分野の視点を内包する総合科学の特徴を持っており、生態学などの知見を基盤に、木材生産や国土保全、治山治水、また山村の暮らしや文化も含む多様な側面から森林の管理に関わる知見を蓄積し、応用科学として社会に貢献している。今後はさらにSDGsの実現に向けて、環境と人や社会との関わりについて、他の学問分野と連携したダイナミックな取り組みが求められる。

他の学問分野との連携を図る手がかりとして、人と自然や環境との関わりが検討されている“人文科学”に着目する。シンポジウムでは、人文科学の視点から環境や自然の課題にアプローチした研究として、森林科学と関連性が深い“森林被害、世界遺産、地域防災、自然体験活動”を切り口とした事例を紹介する。人文科学の研究事例から、森林科学との接点を考える機会とし、議論を深めてゆきたい。

### プログラム

	司会 藤田 早紀(森林総合研究所)
趣旨説明	井上 真理子(森林総合研究所多摩森林科学園)
講演	
1 「環境」史としての森林被害:古文書共有の旅	寺島 宏貴(東京大学文書館)
2 森林から考える世界遺産・富士山の観光史	千原 鴻志(山梨県立富士山世界遺産センター)
3 森林コモンズにおける神と妖怪	高田 知紀(兵庫県立大学)
4 森林科学と環境倫理学:価値観をめぐって	太田 和彦(南山大学)
コメント 森林科学・林政学の視点から	平野 悠一郎(森林総合研究所多摩森林科学園)
講評	小池 孝良(北海道大学名誉教授)

日本森林学会公開講演会（2025年）人文科学から森林科学へのアプローチ

## 講演1 「環境」史としての森林被害：古文書共有の旅

てらしま ひろたか  
寺島 宏貴

### プロフィール

所 属：東京大学文書館（柏分館） 学術専門職員

専 門：日本近世・近代史（江戸後期～明治初期の情報メディア史）

著 書：『思想史講義【明治篇1】』（2022年）筑摩書房（分担）

『山村はどのように災害を乗り越えてきたのか』（2023年）小さ子社（分担）

『天皇を旅する本 vol.4』（近刊）ミサンザイ（分担） など

### 要 旨

歴史研究に用いる史料（古文書）については、東京大学史料編纂所データベースや Japan search のような横断検索システムが拡充され、アクセスが容易になった。オープンデータを駆使した研究例も珍しくなく、エンドユーザにとって高い利便性が日常のものとなった。また最近、生成AI時代の正確な事実性への希求からか、史学的方法の見える化や研究トピックの展望が一挙に進んだ感がある。その一方で、フィールド歴史学を通じて在地で見いだされる、環境史のキーとなる史料や問題も変わらず多い。なお筆記史料の他には、近世・近代の情報メディア（印刷物）の形式と内容が環境史研究にもつ意味も気になる点である。

ところで、ひと口に環境史といっても「環境」は自然、文化・生活様式にわたった多義的・多層的なものだとすると、史学の目的はそのような層の重なりを一枚ずつ剥離しながら時代像を描くことにある。また、歴史研究の大半は個人の著者に帰し、史学の素材としてのモノ＝古文書を扱うには熟達した可読者が必要である。とはいえ史料の、字面の先にある機能や背景を追うために複数領域によるモノの共有は不可能ではないし、それが有効に働く場合もあろう。

歴史的事例として、江戸期の長野県栄村や山梨県早川町といった中山間地での森林被害を挙げたい。1830・40年代の栄地域での御林史料からは、歴史研究者にとって思いもよらなかったナラ枯れ被害の可能性が示唆され、1850・60年代の早川流域では、山村をめぐる中央—地方関係のなか、遠隔地の地震情報をもとに、森林被害が危ぶまれる状況があった。ただ、自然観や制度、支配、生産、商業といったもろもろの「環境」に伴う文書作成者の意思は、史料の形態やレトリックへの深い解釈を時に難しくする。できるだけこの問題を解消するべく、分野間でモノを解読する機会を増やし、実りある歴史の発見を促す必要があると考えられる。



『山村はどのように災害を乗り越えてきたのか』

## 講演2 森林から考える世界遺産・富士山の観光史

ちはら こうじ  
千原 鴻志

### プロフィール

所属：山梨県立富士山世界遺産センター 学芸員

専門：環境史、観光史、木材利用史、文化財科学、木材解剖学

略歴：北海道大学農学部森林科学科を卒業後、2022年に山梨県立富士山世界遺産センターに着任、山梨県立博物館を経て現職

業績：「北見市大島2遺跡の擦文文化の竪穴住居建築材にみられた木材利用法の樹種間差」（佐野雄三、熊木俊朗と共著、木材学会誌 68 (3)、2022年）など

### 要旨

本発表では、発表者が山梨県立富士山世界遺産センターに勤務する中で抱いた問題意識をもとに進めてきた富士山の観光史の研究を紹介し、過去と未来の富士山観光における森林が果たした（果たすべき）役割について考察する。

富士山は2013年に「富士山－信仰の対象と芸術の源泉」として世界文化遺産に登録された。富士山が、世界中の芸術家にインスピレーションを与えたこと、富士講に代表される山岳への信仰が評価されたためであった。

しかしながら、このような富士山の文化的価値、特に信仰の対象であることは、観光客にはあまり知られていない。その理由として、今日の富士山は、そこが信仰の対象であったことを意識しなくても、その雄大な風景や豊かな自然を楽しむ場所であることが挙げられる。

このような富士信仰を意識しない観光は、いつ、どのように形成されたのだろうか？かつては、富士信仰を意識しながら、富士山の自然や景色を楽しむ観光が存在したのだろうか？これらの問いに答えるために、発表者は旅行案内やガイドマップ、絵葉書など多様な史料から富士山における観光の歴史を研究してきた。その結果、20世紀初頭までは、富士山麓を訪れた観光客はそこが信仰の対象であることを認識しながら自然や景色を楽しんでいたが、1920年代ころから、富士信仰の枠組みから逸脱するような新しい観光が成立した可能性があることが明らかになった。

本発表では、このような富士山観光の変容において、青木ヶ原樹海をはじめとする富士北麓の森林が果たした役割を考察する。そのうえで、現在において、森林を対象とした歴史研究が富士山における新しい観光の創出へ貢献する可能性についても展望を述べる。



富士山（富士山世界遺産センターWebページより）

日本森林学会公開講演会（2025年）人文科学から森林科学へのアプローチ

## 講演3 森林コモンズにおける神と妖怪

たかだ ともき  
高田 知紀

プロフィール

博士（工学）

所属：兵庫県立大学 自然・環境科学研究所 准教授、兵庫県立人と自然の博物館 主任研究員

専門：地域マネジメント論、風土論、合意形成学

著書：『神と妖怪の防災学』（2024年）法律文化社（単著）

『地域防災と時間性』（2023年）ユニオンプレス（編著）

研究：地域の神社の立地および民話・伝承における環境描写に着目しながら、自然と社会の関係性としての風土性を明らかにし、それを地域マネジメントに活かしていくための理論と方法を研究。また、多様なステークホルダーが対話しながら地域づくりや環境保全を展開していくための合意形成について実践的研究を展開。

### 要旨

森や山は、必要な資源を得るための共同管理空間（コモンズ）でありつつ、人間の日常生活領域の外に位置しています。伝統的な地域社会において森や山は非日常的空間であり、不可視で不可思議の領域でもありました。人びとは、みえないところで発生するよくわからない事象の原因を神や妖怪に見出し、共有してきました。また、共同で利用する自然資源を持続的に管理するためには、共同体におけるルールと規範が不可欠です。そのために、明示的なルールを設定するだけでなく、神や妖怪といった「超自然的存在」を語ることが共同体の人びとの振る舞いを律していたということをいくつかの事例から知ることができます。

たとえば、兵庫県豊岡市出石町では、祭りの期間に山に入って木を切ると山の神の機嫌を損ねてしまうため、人びとは自粛していました。高知県南国市では、山姥を祀る神社の合祀に際して、境内の木を切り出そうとするとその切り口から血が流れたため、合祀することを取りやめたと伝わっています。沖縄に伝わるキジムナーは、ガジュマルの木に棲み、木を切るとその報復に家を焼かれるといわれます。

神や妖怪を語ることは、「みえないもの」「わからないこと」に向き合いつつ、ルール・行為規範・ゾーニングを一体的に設定し、コミュニティで共有することでもあります。本講演では、神と妖怪を語ることが現代の森林管理においてもつ意味について考察し、その活用可能性について考えてみたいと思います。



『神と妖怪の防災学』

日本森林学会公開講演会（2025年）人文科学から森林科学へのアプローチ

## 講演4 森林科学と環境倫理学：価値観をめぐって

おおた かずひこ  
太田 和彦

所属：南山大学 総合政策学部 准教授、総合地球環境学研究所 客員准教授

専門：食農倫理学、環境倫理学、風土論、シリアスゲーム

著書：『食農倫理学の長い旅』（2021年）勁草書房（ポール・B・トンプソン著、翻訳）

『都市の緑は誰のものか』（2024年）ハウレーカ（編著）

『〈驚き〉を呼び込む自然体験学習』（2025年6月刊行予定）（編著）

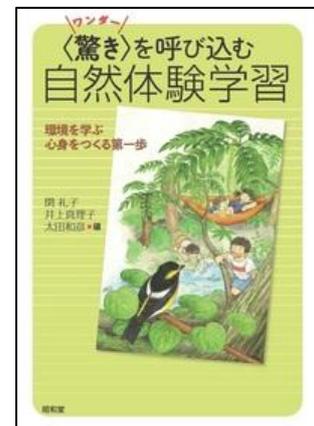
研究：「大加速期」以降により持続可能な社会へと移行する方法や、ゲームを通じた多様な関係者へのアウトリーチを研究

### 要旨

近年、森林は単なる生態資源にとどまらず、文化的意味の交差点としても注目されている。地域住民の語りや記憶に宿る自然観は、祭礼や地名、妖怪などの地域の伝承といった形で各地に独自の価値づけを残してきた。これらは自然科学的な土地利用計画や生態学的管理とは異なるロジックで森を捉えており、防災、自然学習、世界遺産登録といった現場においても存在感を増している。

森林政策や管理を考える現場では、自然科学の知見に基づいた施業指針が見当されることが多く、事実、これらの知見は木材生産や生物多様性評価に重要である。しかしその一方で、地域の住民が森林に抱く意味や価値との接続は必ずしも十分ではない。その結果、地域に利することを目指した政策が、かえって地域側の反発や違和感を招く例も少なくない。本報告では、このような事象の背景にある「is/ought 問題」、つまり「事実に基づく知識 (is)」と「あるべき姿への価値判断 (ought)」の混同や断絶に注目する。

本発表では、こうした非対称性や認識ギャップを整理し、環境倫理学の立場から両者をつなぐ枠組みを提案する。環境倫理学は、政策や開発計画において「どのような価値前提がこの議論に含まれており、何が見落とされているか」を検出し、価値間の調整枠組みや、意思決定の指針を提供することを目指す分野である。今回は、地域の伝承などの集合的記憶の文献分析を通じて、そこに内在する倫理的・生態的意味を抽出し、環境倫理学における価値の可視化・調整プロセスへと接続する。また、多元的価値観に基づく意思決定モデルを参照し、自然科学的根拠に基づく政策が文化的背景を取り込むための経路を検討する。この検討を通じて、「語り」を単なる文化資料ではなく、地域社会がもつ実践的な知識資源として位置づけ直し、科学知と文化知の協働による対話的な森林管理の可能性を探りたい。



『〈驚き〉を呼び込む自然体験学習』

日本森林学会公開講演会「人文科学から森林科学へのアプローチ」  
発表要旨集

発行 2025年5月23日

編集 一般社団法人 日本森林学会企画委員会

〒102-0085 東京都千代田区六番町7 日林協会館内

TEL/FAX 03-3261-2766